

遠くのおばあちゃんとも会話

電気通信大学大学院（調布市）の長井隆行教授（知能機械工学）の研究室が、子育て支援ロボット「チカロ」を開発した。遠方に住む祖父母らがロボット顔にはめ込まれた画面に映り、子どもと会話して子守りしてもらえる。発案した研究員の阿部香澄さん（28）は「チカロは10万円以下で商品化できる可能性がある」とみており、「子育てに奮闘するパパやママの助けになりたい」と話している。

「おばあちゃん、どうぞ」。女の子がチカロの手におもちゃのダイコンを乗せて、画面に映った祖母に笑いかける。「ありがとう」。祖母の声は流れて、チカロはゆっくりとおじぎをした。同研究室が撮影したビデオの一場面だ。

チカロは全長37センチ、重さ3・5キロの充電式ロボット。顔部分に画面とカメラがはめ込まれており、インターネットを通じて離れたパソコンの前にいる人と会話ができる。胴体中央にはバスケットのような形の手も。

電通大 子育て支援ロボ開発

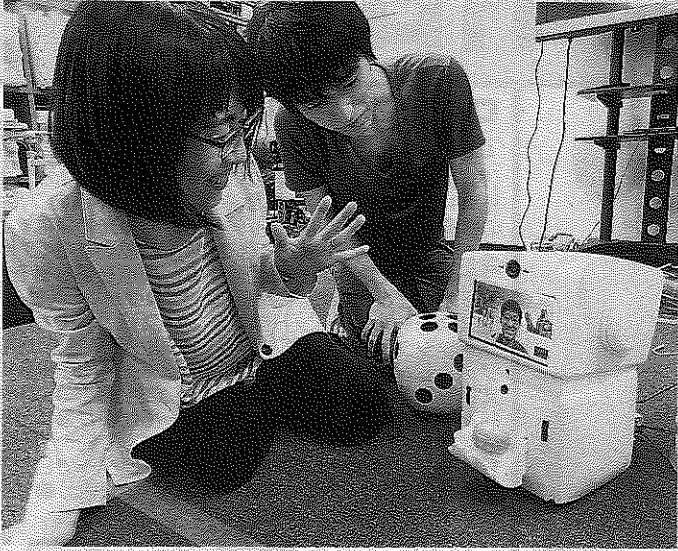
パソコンからの操作で本体は前と左右に、頭と手は上下に動かせるため簡単な手遊びもできる。

きっかけは昨年4月、阿部さんの娘の優月ちゃん（2）が離れず、夕食の支度ができなくなったとだった。テレビ電話付きのロボットがあれば、祖父母に子守を頼めるのでは」と思いつき、研究室の仲間に相談した。

子どもが使うため安全面との両立が難しかったが、胴体に内蔵した赤外線センサーの働きで20センチ以内に近づくと自動停止する「危険察知機能」を完成させた。

その後改良を重ね、現在は子どもが着ている服の色を認識させると、子どもの動く位置に合わせて向きを360度変えられる機能もつけた。阿部さんは「存在感があるのか、娘はテレビなどより興味を持っている。普段接していない祖父にもチカロ越しだと怖がらないで近寄る」と話す。

【習川智子】



チカロの画面越しに会話する阿部さん（左）と開発メンバー。調布市の電気通信大学大学院で